

トーマス・B・グローバー（1838-1911）（左）

スコットランドの商人トーマス・グラバーは、明治維新とその後の日本の工業化の立役者だった。彼はフライフィッシングの愛好家でもあり、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけての奥日光の発展に重要な役割を果たした。彼は、日本におけるフライフィッシングを、持続可能な産業として、また、日本の人々が集う娯楽として確立することに貢献した。

奥日光を訪れたのは、1887 年（明治 20 年）に湯川でマス釣り、1889 年（明治 22 年）には中禅寺湖で釣りをしたのが最初である。1893 年（明治 26 年）には湖の北東岸の大崎地区に家を建て、日光で夏を過ごした外交官の社交場となった。「西六番」の愛称で親しまれたこの家は、1927 年にハンス・ハンターに売却され、ハンターの東京アングリング & カントリークラブの拠点となった。

写真（上から）。

東京のグラバー邸（麻布界隈）

釣り具を持ったグラバー

グラバー邸（東京・芝エリア）

長崎のグラバー邸

* * *

ハンス・ハンター（1884～1947）（右）

ハンス・ハンターは熱心な漁師であり、成功した実業家であり、20 世紀初頭の中禅寺湖の社会的・政治的発展の立役者であった。

日本名はハンタ・ハンサブローで、イギリス人の父と日本人の母の次男として神戸で生まれた。父は実業家のエドワード・ハズレット・ハンターで、後に日立造船株式会社となる大阪製鉄所の創業者だった。ハンスは、1920 年代前半にアジア太平洋地域で最大の金の産出量を誇った大分県の鯛生金山を購入して開発した。

1923 年（大正 12 年）に丸沼トラウトアングリングクラブのメンバーとして中禅寺湖を訪れたのを皮切りに、釣り場として、また社交場としての発展に力を注いだ。

1925 年には東京アングリングカントリークラブを設立し、1927 年には西六番のグラバー邸を購入してクラブの本部としました。会員には欧州各国の外交官や日本の要人が多く、皇族の名誉会員 3 名も含まれていた。中禅寺湖では、社会的イベントを頻繁に開催し、「夏期外務省」の礎を築いた。

写真はこちら。

上) 湯川で釣りをするハンス・ハンター

下) ハンターが釣った魚